

鉛の弾が四方八方から飛んでくる。凄まじい速度のそれを私は弾かず、エネルギーとして私の身体に取り込む。生命が尽きかけていた体は生きることを継続する。相手も馬鹿じゃない、私が生身の人間を吸収しているとわかった途端に白兵戦をやめた。今は遠方から砲弾や無人機が飛んでくるだけだ。

私と世界との戦いが始まって、百八十と一日が経過した。

乾いた風が私の髪を乱す。核ミサイルやら何やらが飛んできていたせいもあってあたり一面見渡す限りの焦土だ。今もお飛来する無人機やミサイルは浮遊砲台が一つ残らず撃ち落とし、残骸は一直線に私の元へと墜ちてくる。しかしそれは私の身体に激突する直前に灰塵と化し、その中から現れた光球のみが私の身体に溶け込んでいく。

今の私の生命の源は魔力だ。そしてその魔力源は……「全て」だ。万物万象、ありとあらゆるものを魔力へと変換する。故に私を傷つけることは誰にも不可能であり、仮令何らかの方法で傷をつけられたとしてもそれは即時再生される。死なないし、体が朽ちる……つまり老いることもない。

私は、いわゆる不老不死になったのだった。

だが、まだ完全無欠な存在というわけではない。周りは焦土で吸い取れるエネルギー量もたかが知れている。そのため今は主なエネルギー源を外部からの攻撃としている。だからもし攻撃が長期間止めば、私は自ら動いてエネルギーとなるものや、場所を探さなくてはならない。そしてそのエネルギーを吸収する速度を上げるためにしなければいけないこともある。

本来ならもっとよい吸収効率なのだが、それを私の常識——「こんなことできるわけがない」という思いが阻害している。

私は生きたい。生きるためならなんでもする。命さえあればなんだって捨てる。

だから私は心を捨てた。私は私が生きることに必要なものだけを私に残して捨てた。でもそれはカタチのないものだから、カタチのないものを捨てるのは難しいから、私はそれに、もういらなくなつた名前と、最低限の命のない肉体というカタチをあげた。そして捨てた。

死んだ体の楓コノハは地面に転がって、完全無欠な私を見ていた。

楓コノハのあらゆる機能は停止している。心臓は動かず、肺は呼吸を諦め、血液は流れない。脳は考えることを止め、目は景色をただ映すガラスになり、耳は鼓膜の震えを伝えない。鼻は匂いを忘れ、何も通らない口は半開きのままで、唇はひび割れ続ける。何もかもが終わっている。形容するなら、これこそが「死」なのだろう。そんなことを思う今の楓コノハの心も直に死ぬのだろう。いや、脳が機能していないのだから心が生きているのはおかしい。心もすでに死んでいるのかもしれない。

またひとつ、私が無人兵器を墜とした。墜落物から新たなエネルギーを得る私は、楓コノハから見ると、生きることに懸命なのではなく生きることしかできないように思えた。

別にそのことを哀れんだりするようなことは無い。なぜならそうやって生きてきたのは、他ならぬ楓コノハ自身だからだ。私は生きる。生きなければならぬ。——そう、固く心に誓つた

のは今から十二年前のあの日だ。心だけになってついさつき、よ



十二年前

「俺は将来的には世界を相手に戦える男になる！ ウエエエエエエエー！」

「ほらそういうとこ直さないと友達ひとりのまんまだよ」

私の幼馴染の近衛トオルは今日もよくわからないことを叫ぶ。愉快な学校帰りだ。

「ぐっ……。だ、だが染み付いたキャラはなかなか変えられないものではない！」

どうやら彼のそのイタイ喋り方は、学校に来た暴漢を撃退したくらいでは治らないらしい。……いや、多分その功績がなおのこ

と助長させているのだろう。

「それで？ 世界を相手になって、どうやって戦うの？」
この面白い男の言うことがもつと聞きたくて、私は話を続ける。

「それはな、四本の剣で戦うんだ。ラグニックとヴァーチャーって言うって……」

世界を相手に。というのとはどうも比喻でもなんでもなく、彼是世界中の人に白兵戦を挑むつもりらしい。この、聞く人に呆れを通り越させ、笑いをもたらす話はいつまでも私を飽きさせない。だが、今日はここまでのようだ。

「あ、もう分かれ道だ。じゃあねトオル君」
手を振ったが、無視される。

「あと二本の名前……あれ、なんて決めたっけ。えーと……」
自分の妄想の世界に浸り込み、そのまま坂を登っていく彼の背中を見送ったのち、私は家のドアを開けた。

「ただいま、？」

返事はなく、奥のリビングから話し声が聞こえてくる。

「ええ、ですからもう半月もたないと……」

「ふざけるな！ まだ発現していない！ もつと引き延ばしてくれ！」

「それは無理です。それに御両親はいつたい何を発現？ させるというのです。あまりオカルトにのめり込み過ぎない方が……」

「黙れヤブ医者が！ とつとと失せろ！」

父親らしき人の怒鳴り声と共に、扉が開く。中から出てきたのは若い男性——私がよく行く病院で、いつも診察してくれる医師だった。

「では失礼します……。おやコノハちゃん」

医師はひどく疲れた顔をしていて、私を見ると少し驚いた顔をして、今度は泣きそうな顔になり、最後に無理をしているとわかる微笑みを浮かべた。様子のおかしい医師を心配して声をかける。

「先生、どうかしたんですか？」

「……。すまないね、本当に。元気でね」

医師は声を震わせて、私にそれだけ言ううと玄関から出て行った。
「え？ あ……。お父さん、お母さん、どうしたの？ 先生泣いてたけど」

リビングに入り、顔を覆っている母と、苦虫を噛み潰したような顔をした父に、おそろおそろ声をかける。父はこちらを見ようとせず、びっくりするぐらい冷たい声でこたえる。

「……コノハ、今日からいつもより多めにする。いや、いますぐ

だ」

「わ、わかった」

その声に私は頷くしかなかった。

「コノハ、頑張るのよ？」

母は私の学校鞆を持って、励ましてくれた。

「う、うん。荷物ありがとお母さん」

ずいぶん前から続けているこの訓練のようなものは、病気がちな私の身体を丈夫にする為らしい。首を絞めて殺そうとしてくる父親に抵抗せず、ただひたすらに耐え続ける。虐待じみたこれを、拒絶したこともあったが、その時の両親の嘆きようがあんまりにも酷かったので仕方なくやっている。

首を絞めてくる父の言うことはいつも同じだ。曰く、『苦しい思いをさせる相手を殺せ、憎め、だが愛を忘れるな。愛を与えてくれる人には愛を返せ。愛しているコノハ』

訓練を終えたあと、いつも通りの夕食が始まる。どうも今日はいつもより強くされたためか、頭がぐらぐらとして目がチカチカとする。両親の会話もいまいち頭に入ってこない。

「どう？ いけそう？」

おひや冷水を飲むもうと台所に立つと、母が料理に使ったと思われる包丁が目に入る。私は喉の渇きも忘れて、その刃の輝きに目を奪われる。

「わからん。だが目に強い光が宿るようになった。もう少しだと析るしかない」

いつのまにか私の手には包丁が握られていた。刃に私の顔が映っている。その刃がほんのりと桜色になる。

「そう……」

「……ごはっ！」

「あなたつぐつ？」

「コノ、ハ……お前……」

「はあつ、はあつ」

「！ は、ハハ。おい、見ろよ……アレ」

「え……ああ！」

「やっただぞ……！ 発現、した……！」

「これで、コノハは生きられる……！」

「ああ、私たちの愛しい愛しいコノハ……どうか、どうか末永い、人生……を——」

握っている包丁は穢れなく、綺麗なまま独特の光沢を宿している。

「はあつ、はあつ……え？ あ？」

今の状況が理解できない私はそれを握ったまま立ち尽くす。ピチャピチャという水音だけが部屋を支配する。

バタンツ！

唐突に部屋の扉が開かれ誰かが入ってくる。

「思い出した！ シュバルツとエフェス……だ……」

それは自分の一番の友人の

「トオル、君？」

流石の彼も絶句して、あたりを見渡し、そして私の手にあるものを見て

「……コノハ？」

彼から疑惑の視線を受けたことではなく、その目に怯えを感じたことに、大きなショックを受けた私は

「あ、ああああ、あああああああああああああ！」
もう、なにかもわからなくなってしまう。

私は口に溜まった血をぺっと吐き出しながらそう呟く。

「それにしても……どうやってあらゆるエネルギーを吸収する私に一撃を……」

「それは、私が唯一吸収したくないものだからだよ」

「っ！……この死にぞこない」

楓コノハはもうその骸の三分の一が黒い影と化しているが、それでも私の前にしっかりと立っている。

「もう楓コノハは死んでる。死にぞこないは、私だよ」

「黙れえ！……ようは直接触れられさえしなければいいんでしょ。なら、触れずに叩き潰してやる！」

そう叫んだ私の腕からさまざまなガラクタが流れ出てくる。戦車やら鉄骨やらがどんどん積み重なって歪なオブジェが造られていく。

「いままで吸い込んできた色んなモノを手足に……なるほど」

たった数十秒でおよそ五十メートルの金属製の巨人が出来上がってしまった。私はその胸部にいるようだ。

「うん！ 私ならそこにすると思ってた！」

「何を言ってるのかわかんないから潰れる！」

巨人が振り下ろした腕を避けて楓コノハは叫ぶ。

「でも！ あえて言わせてもらおうよ、私！ 今、ここにこのわたしこそが！ 楓コノハであると！」

再び振り下ろされた腕も避けたが、その衝撃波で楓コノハの骸は宙に浮きあがる。そして空中で身動きのとれない私に無数の大砲が向けられる。

「私が！ 私だ！ 勘違いするな絞りカス！」

轟音が大地を揺らす。避けられない状態でモロに受けたのだ。

仕留めきれずとも致命傷は与えただろうと思う私の頭上から声が降りかかる。

「私とは違うんだよ、私とは！」

私がそちらを見ると楓コノハは背中から魔力を噴出して飛行していた。広がった桜色の魔力は蝶の翼のようでした。

「飛行……魔法……？ ありえない！」

叩き落そうとしてくる巨人の攻撃を、ひらりひらりとかわしながら楓コノハは話す。

「ありえなくなんかない。想像することさえできるならそれはもう、できることなんだよ。それが魔導。世界でただ一人の魔道士、楓コノハの力だよ」

「違う！ 魔法はそんなキラキラしたものじゃない！ 人を傷つけることしか能がない、どうしようもないものだ！」

「……確かに私はこの力で、多くの人を傷つけて、たくさんの人を殺したよ。それは天地がひっくり返ったって、たとえ過去に戻ってやり直しても変わらないし、許されない事実だよ。でもそれを受け入れることと諦めることは違う。楓コノハは、諦めて全部壊そうとする私を、助けることを、諦めない！」

そう言った楓コノハの肩と腰に、二振りずつ長剣が現れる。楓コノハは二本だけそれを勢いよく引き抜き、巨人の胸部にいる私に向ける。

「全部切り崩して、すぐにそこに辿り着くから」

「偉そうに……！ やれるもんならやってみてよ！」

巨人の体じゅうにある銃器と、その背後から現れる大砲が、対空砲のように私めがけて突っ込んでくる楓コノハに向けて撃たれる。巨人の腕は私を守るように、胸のところで組んでいる。楓コノハは細かい弾が骸に当たるのは構わず、大きいものだけ捌いて、

ほぼ一直線に進む。

「邪魔ア……ッ！」

腕に辿り着くと、二本の剣をでたために振り回して、巨人の腕

私は、ここまで来てようやく自分の異常さを確認することができた。確かにわたしの行動にも納得がいく。

「そんなに時間も無いから……始めてもいい？」

わたしが私の手を握ってくるのを私は拒まず握り返す。

「うん。もう、今更覚悟は聞かない。……でもひとつだけ、確認していい？」

「うん、何？」

「楓コノハは——幸せだった？」

周りが白く変わっていく中で、その問いにわたしはさっきまでより笑みを深くして答える。

「もちろん——とびっきりの——」

「不幸せ、だったよ」



「はは、そりやそうだ。こんな人生で幸せとか言える訳ない」

瓦礫の中で身を起こし、私——楓コノハはひとりごちる。死ぬまであと幾ばくも無いが、私はぼうっと空を眺めていた。

「ここは青空が見えるんだ……空って、こんなに綺麗だったんだ」
知らず私は浮き上がり、飛翔を始めていた。頬を叩く風を感じながら、上へ上へと飛んでいく。

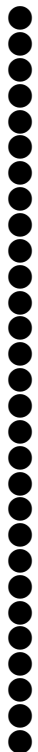
「すごい……なんだか空に落ちていつてるみたい……」

だが次第に上昇する力も弱まり、耳も風を切る音を拾わなくなり、目もかすみ始める。

「ああ………やっぱ、り……届かない、ね」

体の感覚がひとつ、ひとつとシャットダウンしていく。私が最後に知覚したのは、無限に広がる青空と

「コノハ！」
懐かしい人の声だった。



空に爆炎の花が咲いた。

その中心に、先ほどまでいた少女の姿は、その花が枯れた頃にはすでに跡形も無かった。その真下で俺——近衛トオルは膝をつく。

「なんでだ……どうしてコノハがこんな目に遭わなきゃいけないんだ！」

楓コノハ——九年前『昏きソラ』で広域爆発事件を引き起こした容疑者であり、各地の紛争を助長した張本人であり、半年前に世界全体を相手に戦闘行為を開始した史上最悪の犯罪者は、世界連合の派遣した戦闘機のミサイルによってたったいま倒された。それは何の嘘も含まない真実で、どうしようもない現実だった。

「あ、ああ……」

十二年前、彼女はその身に宿す魔力に体を侵され死に瀕していた。彼女の両親はコノハを救うため、さまざまな方法を用いて、ついに彼女の魔法を覚醒させることでそれを達成した。しかし彼女はその時に両親を殺してしまったショックで記憶を失い、魔法のことも忘れてしまう。再び彼女が覚醒するのはその三年後。彼女はその後『昏きソラ』に旅行に来ていたが、突如魔力を暴走させる。被害は甚大で何百人もの人が、一瞬で死んだ。そして彼女はその後の中で失踪する。

次にトオルが彼女を見たのは、戦況を伝える無人機の映像の中だった。必死でその場に向かったが、もう遅かった。

「俺が……俺がせめて支えてやればあつ……」

「広域拡散砲撃！」
クラスターキャノン

楓コノハの持つ銃——p2から無数の砲撃が放たれ、それぞれ着弾した箇所爆発しビルを粉々にする。楓コノハは、破片が額に当たって流れてきた血を拭いながら、p2の排熱機構を動かす。どうもこの銃は本来は剣らしく、誰かが無理やり銃に改造したようで、酷使すると銃身が焼き付いてしまい動かなくなってしまう。だからこうして規模の大きい砲撃を行った後は冷まさなくてはならない。

「一体その尽きない魔力は何処から湧いてくるの……？」

「はいったん攻撃を止めて楓コノハに問いかける。」

「あなたの死んだ体の何処にそんな力が……！」

「心だよ」

「は……？ 何を言うかと思えば、そんな少年漫画みたいなこと。心みたいな不安定で不確定な、存在するかどうかも怪しいモノに死を覆すだけの力はない！」

「それは……そのとおりだよ。たとえどれだけ強い力があっても死から逃れることはできない。だから楓コノハという死人が死人であることに変わりはない。でもね」

楓コノハは排熱の終わったp2を私に向けて話す。

「心に、限界は無いんだよ。そして魔法の力は楓コノハの想像力に等しい。だからこの身がたとえ朽ちていても、楓コノハの魔力が尽きることはないんだ。この体に、心が在る限り」

p2の銃口に桜色の魔力が集められ、それは凄まじい勢いで膨張していく。

「そんなの……ありえないッ！」

私は障壁を何十枚も重ねて防御を厚くする。

「私も受け入れるべきなんだ。わたしたちはもうとつくに死んでるってことを」

「あああああああああああああああ！」

「夢は夢で終わり、少女は幻想を喪う」

放たれた超威力の砲撃に、数百の障壁は一瞬で蒸発し、私の体も呑み込まれた。

土煙が収まるのを待たず、楓コノハは私に向かって歩き始める。ボロ雑巾のような体で転がっている私は何もせずただじっと待つ。

「最大魔法も使うなんて……馬鹿じゃないの？」

「最大魔法——ファントムIIファインタズムと呼ばれるそれは、ありとあらゆる魔法の頂点。故に代償も大きく、発動した者は必ず

死ぬ。事実、楓コノハの骸は既に崩壊を始めている。

「まあもう死んでる身だから、二回死んでも変わらないかなって。それにそもそも私が半年前に最大魔法を使うから……」

「はいはい。私はもう死ぬべきなんですよ。早くしなさいよ」

「うん。じゃあ」

楓コノハの手が私の手と重なり光を発する。眩しい光が収まり、私が目を開くともうそこには誰もいなかった。

「ふう……これでようやくトオル君のどこに行けるんだね……」

徐々に心臓の鼓動が小さくなっていくのを感じる。段々と瞼も下りてくる。もうすぐ走馬灯が見えてくるはずだ。

「まだ、まだ終わらない。終わらせない！」

「え……？」

人の気配と声に目を見開くと、そこにはいつか私を助けてくれた男が立っていた。男は私の落としたp2を拾い、私に向ける。

「二本……足りるはずだ。これで……」

「何を……？」

カシンツと引金が鳴り、私は撃ち抜かれる。いや、私の中の何

かが撃ち抜かれた。

「かつはっ……」

「ぜえっぜえっ……成功、したか……?」

すると突然私の心臓がしっかりとした鼓動を刻みだし、頭もはつきりし始めた。

「なんで……? あなたは一体私に何をしたの!」

男は今にも死にそうな顔で答える。

「お前の……死を、決定づけている、『魔法』という……存在自体を、お前から、切り離れた……。これで、死ぬのは、分離されたモノ。お前は生きることが、できる、はずだ」

私の後方には黒いスライムのようなものが落ちていく。男の言う通りならば、あれが私の『魔法』なのだろう。

男は瓦礫のひとつに寄りかかりゲホゲホと咳き込む。

「大丈夫ですか?」

「ああ、ちよっと病み上がりだね。……煙草、持ってないか?」

私はポケットから潰れたケースを取り出し、その中で一番マシな煙草を一本渡す。

「火は要りますか?」

「いや、いい。ライターは持つてる」

男は煙草を吸いながらじっとこちらを見てくる。

「……あっ、あのまた助けていただいて、ありがとうございます」

「礼を言いたいののはこっちの方だ。生きててくれて、本当にありがとう」

「……? それはどういう……」

言葉の真意を聞こうとしたその時、男が突然私の体を突き飛ばした。

「きゃあああ! い、いきなり何す……!」

起き上がった私が見たのは、さっきまで私がいたところに巨大

な鋼鉄の足があり、男が今まさにそれに潰されそうになっている光景だった。

「ぐああああああああ!」

「い、今助けま……!」

「来るなア!」

男の大声に思わず足を止める。

「いいか! おそらくこれは、お前から切り離れた『魔法』だからお前は今すぐここから逃げる! コイツに捕まればお前は死ぬ!」

「で、でも……!」

「行けエ! お前は、俺が必ず守るッ!」

その言葉を最後に、名前もまだ聞いていない男は押し潰された。p2も共に。

「そん……な……!」

男を踏み潰した鋼鉄の巨人は、今度は私を潰そうとこちらに向かって歩き始める。魔法を失った私はどうすることもできず、ただ立ち竦んでいた。

ギギギギギと金属が擦れあう嫌な音がすぐそこまで迫った時、目の前に大きな光の柱が立った。

「つく……!」

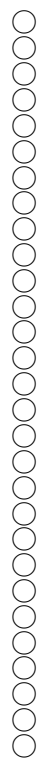
巨人もそれにたじろぎ、二、三歩下がる。

「仮にも名前が近衛だからな。幼馴染ぐらい守れないと恥ずかしくて名乗れない!」

「…………え? トオル、君?」

「十年ぶり、いや五年? 半年? 数分ぶりでもあるか?」

光の柱が消え、そこに立っていたのは、十年前に死んだはずの近衛トオルだった。



手を何度か握ったり開いたりして自分の体があることを再確認する。

「トオル君……死んだはずじゃ……?」

「トリックだよ。いや、俺も死んだと思っただけだな」

魔法を失った無力なコノハを腕に抱いて、鋼鉄の巨人から距離をとりながら、自分がここに居るわけを説明する。

「俺の魔法は転移しかできない。だから『ただ消える』って行為は不可能なんだ。俺は『昏きソラ』で大量の黒い影——『残骸』だっけか。それと時空間転移をした。ただ用いたのが最大魔法だったからな、その時点で俺は死んだ」

追ってくる巨人を p2 で牽制しながら話を続ける。

「だがそれを上官サマとコノハのセンセイが救ってくれた。俺、近衛トオルがここで生きているという形で」

「センセイも……?」

「俺はもともと近衛トオルが三つに分かれたうちの一つの人格だった。それで上官サマ——先代近衛トオルは『全く同じ存在が世界に両立する』という事態を避けた。だからついさっきまでは、正しい意味での近衛トオルは彼だったんだ。……だがそれも彼が死んだことで変わった。本来死ぬはずのない人間が死んでしまった場合、その穴を埋めようと『何か』が動く。それが何かはわからないが、リーマンの昔の言葉を借りるなら『修正力』とでも言うべきものだ」

巨人はまだ本調子ではないらしく、動きは酷く鈍重だった。

「俺はその力の働きでここに現れた。分かれていた人格と合わさった、完全な状態の近衛トオルとして」

「待って、じゃあもしかしてセンセイも……?」

「ああそうだ」

三つ目の人格が彼女を酷い目に遭わせた人間だということは伏せておくことにした。それは俺がこれから贖うことで、彼女が思いうす必要はない。

巨人から数キロ離れた地点で彼女を降ろす。

「? どこ行くの?」

「俺はこれからアレを倒しに行く。それが俺たちの計画の最終ミッションだから」

「ダメだよ! 勝つこない! トオル君の力じゃ……!」

「ははっ、大丈夫大丈夫。今の俺は剣を四本所持してる。十年前とは比較にならない程強くなってる」

そう言い、p2を二つに分けて体から二本の剣を抜き出す。

「これは先代のコノハが創った剣だけど、二元になったのは俺の戯言だ。この剣の機能や使い方は俺が一番よく知ってる」

するとそれまで同じ銀色だった剣らが、それぞれ別の色に染まり始める。

「白色は【ヴァーチャー】、黄色は【ラグニック】、黒色は【シユバルト】、そして空色が【エフェスークリツヒ】。一三歳が考えた、聞くだけで恥ずかしくなるような名前だが」

それぞれ二本ずつ剣の柄を合わせて、二振りの双身剣にする。

それを両手に一振りずつ持って、コノハを振り返る。

「武器として、これほど信頼できるものもない。必ず帰ってくるからここで待っていてくれ」

再び巨人に向き直り、転移の魔法を発動させ、巨人の直上に移動する。

「喰らえデカブツ! これが人生二回分の重みだアツ!」

大きく振りかぶって投擲した二振りの双身剣は寸分の狂い無く、鋼鉄の巨人の両腕を切り落とした。

「まだまだ！」

十年前にコノハにあげていない方の右眼を使い、腕を切り落とした剣の軌道を捻じ曲げ、同じように両脚も切断する。

「これで、終わりだ！」

双身剣を転移魔法で手に戻し、胸部にあるスライム状のコアに突撃する。

だが突然目の前から巨人がいなくなる。

「なっ……?！」

違った。巨人がいなくなったのではない。俺が移動させられたのだ。

「コノハにやった左眼か……！」

次の瞬間、巨人の体中から無数の光線が放たれた。それは魔眼の力で歪曲し、すべて俺へと照射される。

「お、おああああ！」

俺も魔眼を使い、それを逸らす。だがあまりの数に何本かの光線は俺の体を貫く。

「ずっ——。こんの野郎オ！」

今度は投擲でコアを狙うが、双身剣も転移させられ危うく俺自身も斬り飛ばされかかる。直接コアへ零距离転移を試みるも、シールドが張られそれを壊す間に転移させられる。

「こんなことなら眼をやらなきゃよかった」

再生された巨腕を避けながら俺は思わずボヤいてしまった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

遠くからではよく見えないが、トオルが苦戦しているのはわかった。

「でも今の私じゃ何もできないしなあ……」

無力な、何もできない自分が悔しく歯噛みする。魔女だなんだと言われながら、力を失えば幼馴染に守ってもらおうことしかできない。

十年前も、そうだった。

迫りくる『残骸』の相手を十分にできなかった私は近衛トオルに助けられ、彼に全てを任せてしまった。そして彼は——結果的に生きているとはいえ——死んだ。私を守るために死んだのだ。

五年前も、そうだ。

センセイは私を死から救うために、その命を使った。今思えば、あの時の私の復讐心を煽るように仕向けたのも、全部その為なのだろう。センセイも、私を守るために死んだ。

数十分前も、そうだ。

あの男、先代の近衛トオルもセンセイと同じ理由で死んだ。彼も近衛トオルだったのなら、あの時転移で逃げることもできたはずなのだ。彼も、私を守るために死んだ。

「……………今度も、私のために、トオル君は死ぬ？」

嫌だ。ダメだ。それだけはあつてはならない。何故かはわからない。いや、

わかつてはいるがそれを考えとして纏めてはならない。

だがどうすればいい。力を失ったこの身で、どうすれば彼を救えるのか。

(あなたは力を失ってなんかいない)

唐突に脳裏に声が響く。これはつい最近聞いたことがある。そうだ、『私』だ。

(楓コノハ、あなた自身が言っていたことだよ。魔力は、どこから湧いてくるの? それを思い出せば、今のあなたに力が無いなんてことは間違いだとすぐにわかる)

「……………心。心だ。私の想像力と魔力は等しい」

そう呟くと、もう脳裏に声は響かなくなった。『私』はもう楓^{わたし}コノハに溶けて消えてしまった。だがその最後の言葉のおかげで私は立ち上がる。

「この体に、心がある限り、私の魔力が尽きることはない！」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

背面からの攻撃も変わらず転移で位置をずらされる。

「魔眼の能力を視界に縛られずに使うとは……厄介にも程がある」
もはや俺はあの巨人に傷ひとつつけるのも困難になっていた。

膝をつく俺に巨腕がまた振り下ろされる。飛び退いて避けようとするが足が滑り、体制を崩してしまう。

「しまっ……！」

その時迫る腕に桜色の光の奔流が衝突した。

「これは……！」

「大丈夫？ トオル君」

驚く俺の横に、よくわからないものを大量に装備した楓コノハが降りてきた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「どうして出てきた！ それ以前に何故魔法が使えるの？」

到着早々叱責を受けるが、トオルに怪我は無いようだ。

「もちろん、トオル君を助ける為だよ。それとこの力は魔法じゃなくて『魔導』。魔力は一緒だけだ」

「俺を助ける？ そんなことよりお前ははやく逃げ」

「そんなことじゃない！」

私の大声にトオル君は黙る。

「トオル君にとつて、私が守りたいものであるように、私にとつて、トオル君は守りたいものなんだよ！ もう二度と無くしたくない、大切なものなんだ！」

「コノハ……！」

「だから、さ。二人で戦おう？ きっと一人より二人の方があの巨人も倒しやすいよ」

私はそう言って手を差し伸べる。トオルはしばらく悩んだ後、その手をとつた。

「……どうやって倒す？」

「トオル君はあの光線、どれくらいの数曲げられた？」

「数百がいいとこだな。あとは避けるしかなかった」

「なら簡単だ。私が数千のビームを撃つからトオル君はそれの誘導をして。巨人の転移能力の限界が来たところで最大威力の砲撃でコアをプチ抜くから」

「最大威力ってお前……！」

とそこで再び巨人から光線が放たれる。私は上空に飛び上がり、トオルは後方に転移する。

「戦術は立てた！ 知恵もあるし技もある！ 失敗する要素なんて何処にもないし、憂う必要もない！ 準備はいい？」

「……ああ！」

「それじゃ行くよ！ 第一波、斉射開始！」

私の両手両足についていた箱が割れ、そこから無数のミサイルが放たれる。当然、迎撃されるがそのミサイル群は炸裂すると同時に煙幕を張る。

「これで私自身を転移させることはできない。第二波、発射！」

空中に現れた千を超える砲門から桜色のビームが一斉に発射される。

「トオル君！」

「なんて、数だ。はあっ！」

無秩序だったビームはトオルの魔眼で統制され、巨人に向かって殺到する。巨人も魔眼の能力でそれらを逸らし続ける。だがついに何本かのビームが巨人の体を穿ち始めた。

「今だ！ コノハ！」

トオルの声を聞き、私は最大魔導を発動させる。

「これは魔法と似て非なるモノ。魔法を導くモノ、即ち魔導なり」私の肩と腰にある細長い直方体が、巨人の方に向けられる。

「あれなるは魔法そのもの。人が渴望し、それでも手に入らぬ力。

フントム フンタズム
夢と幻の結晶」

そしてその先端に魔力が集まり始める。

「魔力充填完了。障害物皆無。姿勢制御良好」

あげた左腕にも魔力が集まる。

「これが私の全身全霊、全力全開、渾身の一撃！」

そして私はその腕を鋼鉄の巨人に向かって振り下ろす。

「魔法は、私の夢。夢が一人歩きを始めればそれはきつと――」

肩と腰の直方体四つと私の左手から放たれた光の槍は、煙の壁を突き抜け胸部を守ろうとする巨人の腕もすり抜けてコアへと到達する。

「目が覚める合図――！」

スライム状の私の『魔法』だけが消えていく。ひとかけらも残さず、一瞬で。

こうして、私たちの最後の戦いは終わった。



「じきにここへ軍隊がやってくる。俺達が戦っているのは静観しても、事情を知っていそうな人間をただで帰すような真似はしないでらう」

「……うん、そう、だね」

「コノハ？」

元気のない返事に振り向くと、そこにはうずくまって苦しんでいる彼女がいた。

「コノハ、やっぱりお前……！」

「へへ……魔導、なら大丈夫かなって、思ったんだけど。そんなわけ、ないよね」

抱き起したコノハは弱弱しく微笑むが、その口の端から垂れる血が全てを物語っていた。

「この、馬鹿野郎！……そうだ、今俺の魔法でお前の死を何処かへ転移すれば……！」

だがそうしようとした俺の手を、コノハが思いの外強い力で止める。

「ダメだよ。それに、トオル君の魔力源である剣も、さっき私の魔導で消しておいた」

「どうしてだ！ そんなことをすれば自分が死ぬとわかって……どうして！」

「人は死ぬんだ。それは生きてる以上逃れられないし、逃れてはならない。私は本当なら半年前で死んでる身なんだ。もう十分。延命措置は必要ない」

「でも……！」

「もう……いい年した男が駄々をこねるなんてカッコ悪いよ？ うん、でも確かに別れは悲しい。じゃあ、また会えればいい？」

「は？ それはどう……！」

